

特集

共に生きる

新しき村と武者小路実篤の想い
むしやこうじさねあつ



「白樺派」の代表作家であった文士・武者小路実篤が大正7年宮崎県児湯郡木城村（現木城町）に実篤の理想に共鳴する同志数10人と共に、「新しき村」を開設した。

「新しき村」は、労働にいそしみつつ、自己を磨き、お互いを生かしあうための共同生活の場である。昭和14年宮崎県の「新しき村」（日向の村）の一部がダム建設の影響を受けることとなり、毛呂山町へ移転することになった。

実篤が提唱した理想郷「新しき村」は、およそ92年も前に開設したにもかかわらず、現在に至るまで守られ続けている。なぜ「新しき村」はこのような長い時にわたり続いているのだろうか。また、毛呂山町とはどのような関係であったのだろうか。そして、「新しき村」とはどのようなところなのだろうか。



新しき村

—それは、当時の社会において
およそ画期的な考え方—

大 正7年、武者小路実篤は以前

から抱いていた理想社会についての考えを自ら創刊に関わった雑誌『白樺』などで発表した。この呼びかけに全国各地から賛同者が集まり、新しき村の運動が急速に盛りあがった。そして、同年11月には実践の場として宮崎県児湯郡木城村（現木城町）に新しき村が創設された。当時の社会状況において、階級も身分も超え、本来の人間らしい生活を求めるこの提唱は、たいへん画期的なものであった。

この背景には、学生時代に夢中になったトルストイや、華族でありながら農耕生活を経験した叔父勸解由小路資承（こうしすけよ）の存在が影響したようである。また、大正6年のロシア革命、翌年の米騒動やシベリア出兵が起る当時の社会状況や時代背景も少なからず影響を与えたものと思われる。

新しき村の理想は、社会主義では

なく、共生主義・生命主義であるといえる。それは実篤が自ら唱えた『新しき村の精神』のなかにあらわされている。また実篤は、村は「全世界の人間が天命を全うし、各個人の自我を完全に生長させ、相互の協力と調和に満ちた世界の建設を目指した共同体」としている。人間の内面にある「自我」すなわち自己、あるいは個性というものを完全に生長させることのできる社会を目指し、自己を生かしながらも、他人を尊重し、共に生きていくことを謳うたっている。すなわち、自分を生かし、他人を尊重することに重きを置き、そのためにすべての人が人間らしい生活ができるように協働することを考えたことが、新しき村の設立にいたった理由であると考えられる。実篤は、すべての人が公平に幸福になれる社会を目指したのであった。

みんな元気生きよう

武者小路実篤の人物像に迫る

調布市武者小路実篤記念館

「負い目」から始まった

武者 小路家は、江戸時代初期より京の朝廷に仕える公家の家系であった。

明治18年5月12日、実篤は、武者小路家の8人兄弟の末っ子として生まれた。父親は実篤が2歳のときに亡くなり、母親の手で育てられた。

実篤が育った時代、日本はまだ階級社会であり、実篤は華族としての恩恵を受ける立場であった。しかし、実篤はそのような立場に疑問を感じ、負い目すら感じていた。

こうした思いを持ち続けた実篤は、自身が抱く理想社会についての論考を自らが創刊に加わった雑誌『白樺』に発表した。その反響は大きく、大正7年7月、機関紙「新しき村」を創刊し、全国に賛同者を募るなど、具体的な行動をおこして



いった。

前向き思考

しかし、実篤の考え方は、当時の文人のなかで、楽観主義ともいわれた。「実篤のことを楽観主義と見る人もいますが、実篤自身、青年期において挫折、様ざまな悩み、厳しいことにあっています。そういう経験から、誰しも悩みや苦しみはあるもので、苦しい時こそ見方を変え、前向きに物事を捉えることで、苦しみを乗り越えようとする術を見出し出していったのではないのでしょうか」と調布市武者小路実篤記念館首席学芸員である福島さとみさんは語ってくれた。

できなぐいんぼきなぐい

大 正7年11月実篤は、宮崎県木城村（現木城町）に土地を

武者小路実篤記念館・実篤公園



武者小路実篤の死後、数々の愛蔵品、遺品、邸宅などが、ご遺族により調布市に寄贈され、これらを保存・公開しているのが武者小路実篤記念館と実篤公園です。

武者小路実篤記念館では、実篤の原稿や手紙、画や書、著作をはじめ、愛蔵の美術品や交友のあった人たちの作品や資料を収蔵しています。

隣接する実篤公園は、旧実篤邸のほか、湧水を水源とした大小の池のほか花木や野草が咲き、武蔵野の風情を感じることができます。



所在地／東京都調布市若葉町1-8
-30 ☎03(3326)0648
開館時間／9:00~17:00
休館日／月曜日(祝日の場合はその翌日)、
年末年始
ホームページ／<http://www.mushakoji.org/>



調布市武者小路実篤記念館
首席学芸員 福島さとみさん

得て、ついに「新しき村」を創立した。しかし、村の建設にあたったのは農業経験がない青年がほとんどであったため、土地の開墾や家の建築など苦勞の連続であった。しかし、福島さんは「確かに初めは、苦勞の連続だったようですが、辛かったという話は、不思議とあまり耳にしないんです。実篤は、できないことは無理はさせず、時には諦めることも勧め、疲れたら休めばいいと村の人に言っていたと聞きます。物事は簡単に進むものではないので、進めていくためには、まず、多くの人の色いろな考え方を知ることが大切であると考えていたようです。そのため、当時の村の人からもその懐の深さから絶

大な信頼があったようです」と説明してくれた。

老いは尊敬されるべき

晩

年、実篤は、妻と2人で調布市で過ごした。その生活は、原稿の執筆や絵画が中心で、穏やかな生活であったといわれている。「実篤は、晩年、老いは負い目ではなく、年を重ねることは人間の幅が広がることで、むしろ若い人から尊敬されるべき存在であると語っています。この言葉も実篤が、物事を悲観的に捉えないというところからきている言葉だと思えます」と福島さんは語る。実篤は、晩年に『一人の男』という長編自伝小説を書いた。そのな



実篤の書斎(調布市)。晩年この場所で画や書の作品を手がけた。

かで「みんな人間らしく、元気に、せいっぱい生きよう」と老いてなお、多くの人たちに向って呼びかけていた。

それぞれが感じてほしい

そして、福島さんは実篤記念館の来館者に対し「実篤記念館

に来館してくださる人からは、実篤の言葉に勇気づけられる、元気づけられるという感想を多くいただいています。辛いこと、苦しいこと、そして悩みは人それぞれで違います。それぞれの人が、実篤の言葉で前向きに生きていけるため何かを感じていただければ、私は嬉しく思います。また、多くの人に実篤の作品を知ってもらえるように努力していきたいとも思っています。しかし、実篤自身は、作品を生み出すことが大切であると考えていたようで、出ま上がってしまった作品にはあまり興味がなかったようでした」と笑顔で語ってくれた。

楽

しむに如かず

始まりの村に生きる人

日向新しき村



日向新しき村 松田省吾さん

日向の村の誕生

武者小路実篤は、日向（今の宮崎県）に土地探しの末、大正7年11月同志と「新しき村」の土地に鉄入れした。そこは児湯郡木城村（現木城町）大字石河内字城、昔の城跡で三方を小丸川に囲まれた別天地だった。人間が人間らしく生きられる生活のための義務労働は、1日8時間、農業を中心として作業を行い、それ以外は自由時間として各自が文学、芸術、音楽、演劇などに親しみ、個性を伸ばす方針にした。

新しき村は、村内で生活する人の村内会員と村内に住まなくとも村の精神に賛同し、村の外でもともに活動する村外会員という二種の会員で成っていた。実篤自身も開村からおよそ8年間仲間と共に汗を流した

が、その後は、村の外に出て村外会員となり、盛んな執筆活動で精神的、経済的に自らの理想を支援する立場に回った。当時の村の活動資金は、ほとんどが実篤の執筆活動によるもので、ほかには寄附と村外会員の会費などでまかなわれていた。

草創期の苦勞

村の会員は、そのほとんどが都市で生活していた人で、農業には不慣れたため、開墾、家の建設、水源から水路を引く事業など村の建設には大変な苦勞が伴った。

また、村への考え方の違い、共同生活での人間関係、資金づくり、健康などの問題で村を出て行く人も少なくなかった。しかし、大正末期から昭和初期にかけて、灌漑設備、発電施設、印刷所などが整備され、農

国策ダム建設の影響

業経営も徐々に軌道に乗りかけていった。

実篤在村時、一時は50人もいた村内会員のなかには果樹や養鶏など地方には稀な取組で成果のあ

がった分野も見られたが、時勢の影響や会員の事情などで村内生活者は減っていった。昭和13年、村の肥沃な土地が水没するにいたる国策のダム建設が着工されると、それをきっかけに実篤は、交通に便利で会員も訪れやすい土地にさらなる新しき村（東の村・毛呂山町）を開設した。

東と西 戦後の村

そして戦後、東の村は、新しき村の本部として機能し、日向の村は、誕生の地として残った。

新しき村創立50周年を祝して木城町が町民の寄附により建立した碑（白木八重牧場）



山と山とが讃嘆しあうように
星と星とが讃嘆しあうように

人間と人間とが讃嘆しあいたいものだ

実篤詩「君も僕も美しい」より



大正9年 新しき村（日向）
後列左から6人目が実篤



日向新しき村 武者小路実篤記念館

町や地元地区と木工・建築リフォーム、書画、小学校臨時講師、有機農業実践、放牧養豚実験などの協力

自分を教材として

昭和44年、夜間大学を卒業、新たな勉強の場として東の村に入村生活をしてきた松田省吾さんは、日向の村の先達夫妻が高齢期にさしかかったのを案じ、昭和51年33歳の時に日向の村に骨を埋めることを決意し、移住した。「日向の村は、小舟で小丸川を渡らねばならない絶海の孤島のようなところでした。しかし、お二人が晩年を安んじて暮らしていただきたく移住しました。そして一年後にヤイ子さん（妻）も移ってきました」と当時を語る。

「楽」

を、裁判所とは、少年保護受託の実践協力などで交流している。「年を重ねることで、本当に生長するのだろうか。一個の人間の自分を教材にして人間を観照してみたい」という関心が強かった。「東の村にいたころに思ったことのひとつとして、村に必要な建造物は村の人の手で、自分たちでできたらいいと思ってましたが、それが現在自分で造れるようになった」と語る。

松

田さんは、これまでの生活で辛かったことはないと言う。

「私は若いころから孔子の『楽しむに如かず』という訓えに心感じていました。入村して間もなく、実篤先生に『楽』という一字を書いていたことがありますが、学びも仕事も年齢を加えていく人生でさえも、節制・養生・真心・勇気を持ち楽しむことで日常が開けてゆくと感じます。『日常の生活の中に火を 人間の心の内に火を たえざる火を』そして、『急がず 休まず』の心構えです」と語る。今夏、知人の子中学2年生の男子が10日間体験入村する。「長・短期滞在は昔も今も珍しくない」と松田さんは「日日新」である。



平成21年 日向新しき村全景



大正9年 新しき村全景（手前は小丸川）

中島 栄一さん

Eiichi Nakajima

「父は孫を連れて、村へ遊びに行くことを楽しみにしていました」

新しき村との付き合いは、父豊作の代からです。近所だったこともあり、よく農業を教えていたようです。村が毛呂山町に来たころ、村の人がよくうちに農機具や風呂を借りに来ていたことを覚えています。また、父が美術館の土地を村に貸したことも新しき村との関係を深めることになったと思います。父は普段から孫を連れて、村に遊びに行くことをとても楽しみにしていました。

私の家では、実篤さんのことを親しみをこめて「ジツクさん」と呼ぶんです。父がそう呼んでいたから私も今でもそう呼んでいるんです。今も村とは、近所付き合いをしています。年を重ねることで近所付き合いの大切さを感じるようになりました。今は毎年のお祭りに行ったり、卵や椎茸を買いに行ったりしています。



「新しき村がよくなって
も近隣のためにならない
のではよくない」という
のが設立当初からの実篤
の信念だった。そのため
毛呂山町に村が移転して
からも、様ざまな人との
交流が村と住民との間に
あった。
新しき村は、決して外
部に門を閉ざしているの

仲よき事は美しき哉

村と交流をしてきた人たち

INTERVIEW

山口 満さん

Mitsuru Yamaguchi

「子どものころ、村へは紙芝居などを見によく遊びに行っていました」

父貞治^{ていじ}は、真面目で誠実な人でした。また、新しき村の村外会員として、その精神を理解していたと思います。そのため、村から養鶏の指導を頼まれると快く引き受け、よく村に行っていました。その影響もあり、私も子どものころ、紙芝居を見に行ったり、栗拾いをしたりとよく村に遊びに行っていました。

大人になってからは、自分の家の養鶏が忙しくなり、あまり行くことは出来なかったのですが、私が結婚をするときに、実篤先生に^{いっぶく}絵画を書いていただいたことにとても感銘を受けました。その一幅は、今でも大切に持っています。実篤先生の絵は、野菜など素朴な素材が多く、特別な親しみを感じています。今後も毛呂山町と新しき村が共に発展していくことを願っています。





綾部 有子さん

Yuko Ayabe

「私にとって村は、今を生きるための
全てを教えてもらった場所です」

私は、昭和52年から6年間、新しき村なかよし幼稚園で園児と一緒に勉強をしました。自分の子どもも自然のなかで伸び伸びと学ばせてあげたいと考え、なかよし幼稚園に入園させました。なかよし幼稚園は、園舎こそありましたが、天気の良い日は、屋外で、それも野山で自然の教材を使い勉強しました。また、園は村のなかにあつたため、運動会にぎのときなどは、村で暮らす人たちが飛び入りで参加をし、それは賑やかだったことを覚えています。

なかよし幼稚園は昭和59年に閉園してしまいましたが、私は、村を多くの皆さんに知っていただきたいと思い、毎年のお祭りではバザーに参加しています。私にとって、村での経験が、今を生きるための全てのことを教えてもらったといっても過言ではありません。

ではなく、むしろ近隣地域もよくなることをめざしていたため、農業や養鶏の面では近所の人に助けられることが多かったが、村のお祭りでは珍しい都会の芸術を催し、近隣地域の人たちを楽しませた。東の村創立にあたって実篤は、「村の祭日は、一番気候のいい時で稲の収穫が済んだ時分の日曜にし、近所の子供や、青年の喜ぶようなお祭りをする。」とし、また「・(略)・」祭日は近所の人を喜ばすことを目的とし、近所の人に謝恩を心がける。」と覚書に書いている。

また、当時の託児所不足を解決すべく、昭和43年に「新しき村なかよし幼稚園」を村内に開設した。幼稚園は村内の子どもを預かるだけではなく、近隣地域の子どもたちも受け入れ、農業など働く母親たちの需要に応え、地域への貢献を果たした。この幼稚園は昭和59年まで開園していた。



小川 孝子さん

Takako Ogawa

「村は、とても気が休まる場所であり、
一番居心地がいい場所です」

もう、村との付き合いは、かれこれ30年を過ぎました。始めは梅の実の剪定せんていを頼まれたのがきっかけだったのですが、以来随分と長くお付き合いをさせていただいています。

私は、昔から身体を動かすことが好きで、何より自然が好きでした。そんな理由もあり、いつの間にか村に来ることが楽しくなりました。私にとって村は、気が休まる場所であり、一番居心地のよい場所といえます。現在は、主に売店のお手伝いをさせていただいています。村に来るようになって、いろいろなことを勉強させていただきただけでなく、いつしか友だちも増えたように思います。村は、空気はいいし、緑も多い。本当に心安らぐ場所です。ぜひ、皆さんに来てもらいたいと思います。

共に咲く喜び

想いを受け継ぐ人たち

東の村 (毛呂山町新しき村)



昭和14年 東の村での仕事始め (左から7人目が実篤)

東の村の開村

ダム建設が具体化するなかで、実篤はもつと東京に近い土地に「東の村」を開くことを考えた。実篤が、武蔵野一帯（東京都多摩地域、神奈川県、埼玉県域）を希望していたところ、東武鉄道株式会社から現在の土地の斡旋があつた。また、地元有志の意向も加わり、昭和14年9月毛呂山町大字葛貫の雑木林の丘を購入した。

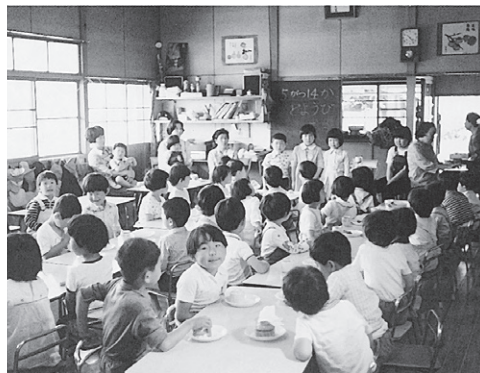
東京から電車で約1時間半の地に新しき村を設けたことは、実篤の村への訪れを頻繁にしたばかりでなく、村外会員が月に一度村に集まり、村の建設に携わることも可能にした。日向の村を創立したとき、実篤は33歳の若者であったが、このときは54歳。変わらぬ強い信念に壮年



新しき村の記念祭には、毛呂山町からも多くの観客が訪れた

村と町民との交流

毛呂山町に移転した新しき村に對し、当初、地元にも不安に思うところもあつたようだが、そのなかで町民と村との交流を進めたものに「お祭り」と「新しき村なかよ



新しき村なかよし幼稚園の授業風景

し幼稚園」があげられる。実篤は、村の目的のひとつとして近隣や社会に貢献することをあげている。村のお祭りは、創立記念祭として毎年9月の第三日曜日に催され、現在も行われている。昭和30年代には都会的な雰囲気は珍しく、町内外から大勢の観客が訪れた。また、なかよし幼稚園は当初、実



篤自身が園長を務めていた。昭和43年からの16年間で、多くの卒園者を出した。

義務労働

そして町民と村との交流を生む最大の要因となったのが農業である。

実篤は、村の経済基盤を農業におき、義務労働とした。その本意は実篤が、農本主義とも言える農業への憧れがあり、農業を経済基盤とした社会建設をめざしていたからである。実篤は自ら、「それは百姓が労働の一番のもとだからだ。」と表現している。

しかしながら、東の村の土地は、

日向の村の土地と同様に地力の劣る土壌であったため、村民は、苦難を強いられた。特に戦中戦後は物資不足で窮乏の日々が続いた。

戦後、国は「新農村建設計画」を策定し、各県に農業改良普及員を配置、戦後の農業再建に取り組んだ。そのようななか、町における農業改良普及員が村の農業改善に指導をする傍ら、近隣の人たちも援助を行うようになっていった。見知らぬ土地と農業経験者の少ない村にとって、近隣農家の協力は心強いものであったに違いない。このような篤志・篤農家の協力に接し、村では折に触れて、感謝状を贈るなど、謝意を表し、人間的な交流を深めてきた。

新しき村の精神

一全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自教を完全に生長させる事を理想とする
一その為には、自己を生かす為には他人の自教を害してはいけない
一その為には自己を正しく生かすようにする。自分の快楽を犠牲にして、他人の天命と正しき要求を尊重してはいけない
一全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとり、全世界の人間が同じく義務を果せば、自由を樂しむ正しく生かす水、天命個性も心を全うする道を歩くように心がける。
一かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能性を信じ、全世界の人間が実行する事を祈るもの、又は共に望むもの、それは新しき村の会員である我等の兄弟姉妹である。
一それは我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事を入らうとする事で、それ等の人が本當に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為には骨折るものである。

千九百五十九年一月一日

實篤書





昭和51年ごろの新しき村（東の村）

村の養鶏。そして、自活へ

戦 後の村の経済基盤を大きく変えたのは養鶏であった。養鶏

は、毛呂山町が全国に先駆けて始め、村もまた、昭和24年より開始する。やがて共同経営のモデルとして、全国に名を馳せた。村の養鶏の発展もまた、毛呂山養鶏の発展生長と共栄共存の歩を進めた。

養鶏を始めて10年目の昭和33年村の収支決算が初めて黒字に転じ、念願の自活を達成した。その後30年近く、養鶏の収益は伸び続け、村の経済基盤を磐石ばんせつにしていった。昭和60年前後から、養鶏は低卵価により、



村に立てる標柱きごうに揮毫する実篤

不況の影響を受け始めるが、そのころには、養鶏のほかにも水稲、椎茸、茶、陶芸などが好成績を収めるようになっていた。

町への文化的影響

新 しき村が、毛呂山町に移転して以来、村と町民との間に様

ざまな交流が図られてきたが、芸術、文化の面においても町に与えた影響は少なからずあったことであろう。村の様ざまな芸術や文化に触れる機会が増え、そのなかでも実篤の作品との出会いは、大きな影響を与えたと思われる。

実篤は、東の村の時代、村の自然

武者小路実篤記念 新しき村美術館



武者小路実篤記念新しき村美術館は、昭和54年、新しき村60周年を記念して設立を決定し、翌55年開館しました。

美術館は、実篤が提唱し、設立した「新しき村」のなかに佇む美術館です。実篤の原稿や手紙、画や書などの作品や資料を展示、収蔵しています。

また、館内には、図書室も設置され、実篤の著作をはじめとし、実篤と交流があった人たちの著作も閲覧できるようになっています。



所在地／毛呂山町大字葛貫 423

☎ 049 (295) 4081

開館時間／10：00～12：00

14：00～17：00

休館日／月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始



新しき村は、現在も毛呂山町葛貫の自然豊かな場所にある。

村の現状

実篤は、昭和51年、90歳で天寿を全うする。それから4年後の昭和55年実篤の数々の作品や著作を展示・収蔵する新しき村美術館が開館する。美術館の開館により、誰もが気軽に実篤の天真な作品を観賞することができるようになった。

や村で採れた野菜などを多く描いている。日向の村時代の経験から、作物を作り、育て、収穫するまでの苦労を知っている実篤は、一方で「自然は不思議」「自然の造ったもの萬歳」と観て讚美するのであった。

友情都市

村では、今も農業が中心で、村で採れた米や卵、椎茸などは村内の売店で販売されている。現在村には、15人の人たちが生活をし、開村時から「新しき村の精神」を心に日々精進している。

毛

呂山町は、平成20年2月、宮崎県木城町と友情都市の盟約を締結した。それ以来、毛呂山町と木城町との間に交流が行われるようになった。この友情都市は、新しき村が取り持った縁である。今後、両町の間には、それぞれの地域社会の生長のための親善友好交流が続き、深められていくであろう。

村では、今も農業が中心で、村で採れた米や卵、椎茸などは村内の売店で販売されている。現在村には、15人の人たちが生活をし、開村時から「新しき村の精神」を心に日々精進している。

新しき村美術館長

寺島 洋さん

「美術館だけではなく、村全体を見て回って、心で感じてもらいたい」

新しき村は、自己を生長させることを目的に、その志を同様にめざす人たちが共同生活を行う場所です。美術館は村のなかにありますが、村には、美術館だけでなく他にも数々の作品があり、そこで働き、生活をしている人もいます。本来の意味で村の全てが美術館といえます。

美術館に来館される方には、ぜひ村を見て回っていただき、村の空気を身体で感じ、新しき村とは何なのか、実篤先生が、ここで何を考えていたのだろうかなどを心で感じてもらいたいと思っています。実篤先生の作品は、対象をよく観察し、自分の気持ちに忠実に表現されています。そのため人に伝わるものだと思います。村に来ていただき、ぜひ、この空気を感じてもらいたいと思います。



和

して同ぜず

想いは伝えられ、後世へと続く



和而不同

「和而不同」(和して同ぜず)とは、孔子の言葉で論語

に出てきます。実篤先生は色紙などにこの言葉をよくお書きになりました。新しき村の精神に通ずる言葉であると思います。「君子は、それぞれ独自の道を進みながらも調和を保つ」との解釈ですが、新しき村での生き方もこの精神であると思います。また、私は、調和とはオーケストラに例えることができます。オーケス

トラでは、それぞれが独自の音色を奏でることのできる様々な楽器が、それぞれの特徴を生かしつつ、豊かで美しい音色を奏でることのでひとつの楽曲を創りだしています。

自己の生長と他者との調和

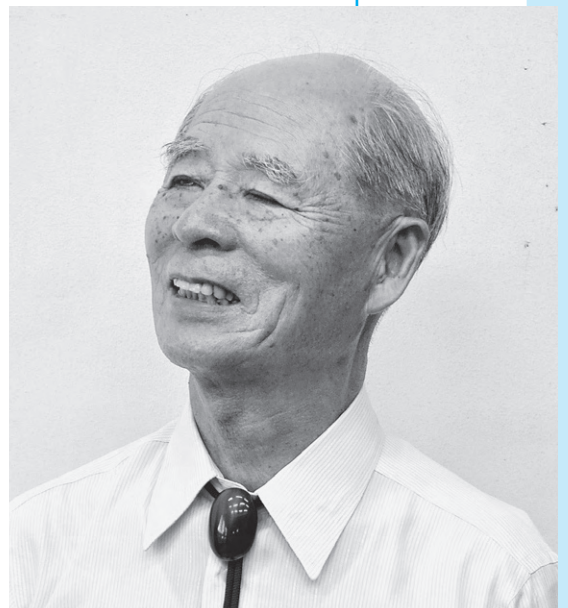
私も数年間、村で生活をしまし

た。当時は全て手作業で開墾作業をしていたため、冬は毎晩のように手足のあかぎれの手入れをしました。それでも辛いと思ったことは一度もありませんでした。また、村は共同生活のため、仲間との調和は大切なことです。皆それぞれが自己の生長を目的にしていますが、それだけでなくお互いが生長することも意識していたために、調和が保たれていたのではないかと思います。

共に咲く喜び

実篤先生は、よく「共に咲く喜び」と画賛にお書きになりました。それに対し、自己犠牲という言葉がお嫌いでした。自分を生かすことが他者のためになる。そこに共に生きることの喜びが感じられる。

この言葉にはそういう生き方が込められているのだと思います。そのような実篤先生の理想に賛同する多くの方々がいらつしやるのが、新しき村が今まで続いている大きな理由ではないでしょうか。新しき村の精神には、人間のあり方が記されていると思います。この精神に賛同する人が増えて、世界の調和に繋がれば私も嬉しく思います。



新しき村理事長

石川 清明さん
きよあき

新しき村が毛呂山町に移転して70年が過ぎ、その間に町民と新しき村との間に様々な交流が図られてきた。農業や養鶏の発展、幼稚園の開園、村祭りの開催など多種多様な分野で新しき村と町とは共に歩んできた。

武者小路実篤が物質面よりも精神の豊かさを唱え、競争よりも共生を提唱して築いた新しき村は、今や毛呂山町にとって大きな財産ともいえる。

新しき村が開村してからすでに90年以上の時間が流れた。しかし、実篤の想いや実篤が唱えた共生の精神は、現代においても朽ちることなく生き続けている。価値観や考え方が多様化しても、新しき村と毛呂山町は、これからも共に生きていくのだろう。

『君は君 我は我也 されど仲よき』

● 今回の特集を作るにあたり、取材などに協力してくださった皆さん、貴重な資料を提供してくださった皆さんに心より感謝を申し上げます。

● 取材協力、資料提供（敬称略・順不同）
財団法人新しき村、調布市武者小路実篤記念館、日向新しき村、石川清明、寺島洋、松田省吾、福島さとみ、中島栄二、山口満、綾部有子、小川孝子

● 参考・引用文献
「第10回特別展 武者小路実篤と新しき村」毛呂山町歴史民俗資料館、「新しき村開村90周年記念 第16回特別展」実篤が見た風景―日向の村・東の村と毛呂山の人々―毛呂山町歴史民俗資料館